電気通信大学紀要26巻1号 pp.9-18（2014）〔論文〕

沈徳潜若年期の論詩絶句及びその詩学的意義について

范　建明

一、はじめに

『沈徳潜詩文集』には沈徳潜（一六七三－一七六九）若年期の詩集『一一斎詩』が収録されている。[1]その内の巻六甲申（一七〇四）に「抄唐宋人詩稿数種，偶題絶句」という論詩絶句がある（以下、「論詩絶句」と呼ぶ）。「論詩絶句」は、合わせて十二首あり、主に陳子昂・李白・杜甫・韓愈・王維・孟浩然・劉長卿・柳宗元・韋応物・白居易・李賀・李商隠・蘇軾・歐陽修・梅堯臣・永嘉四霊・陸游などの唐や宋の詩人についての論評である。これら詩人のうち、陳子昂は唐代において五言古詩の復古を提唱した第一人者である。杜甫・韓愈・蘇軾は、沈徳潜の師である葉燮（一六二七－一七〇三）の最も推賞する詩人である。王維・孟浩然・柳宗元・韋応物は、即ち沈徳潜の前の詩壇盟主王士禛（一六三四－一七一一）の尊重する詩人である。また、杜甫・李白・王維・韋応物の四人は、沈徳潜が四十五歳の時に編纂した『唐詩別裁集』（以下、「初刻本」と呼ぶ）及び九十一歳の時に改訂した『唐詩別裁集』（以下、「重訂本」と呼ぶ）において、それぞれ第一位から第四位の位置に配列された詩人である。蘇軾と陸游は、沈徳潜が晩年に編纂した『宋金三家詩選』における最も重要な二人である。さらに李白・杜甫・韓愈・白居易・蘇軾・陸游は、後に乾隆皇帝が御選した『唐宋詩醇』に選ばれた六人である。要するに、「論詩絶句」は明清詩壇における唐代五言古詩に対する評価、李杜と王孟に対する評価、唐詩と宋詩に対する評価といった重大な詩学問題に係わっている。したがって、「論詩絶句」は若いころの沈徳潜の詩学的見解を認識することにおいても、清代の詩学の発展、特に王士禛から沈徳潜への詩壇における流れの変化を把握することにおいても、重要な意義を持つと考えられる。小論は、まず「論詩絶句」の内容を解説し、若年期の沈徳潜の唐宋詩に対する評価を把握したうえで、彼の詩学思想の形成過程および清代詩学の発展において「論詩絶句」の持つ詩学的意義を明らかにしようとするものである。

二、「論詩絶句」の内容

感遇傷時陳子昂　　感遇　時を傷む　陳子昂
獨抒情性變齊梁　　独り情性を抒して斉梁を変う
後來韶濩雲山曲　　後来（のち）の韶濩雲山の曲
一片風流屬漫郎　　一片の風流　漫郎に属す

これは第一首で、陳子昂についての論評である。沈徳潜は、陳子昂の代表作である「感遇」（三十八首）はもっぱら作者の気持ちを述べる「時を傷む」作品であり、斉梁時代の詩風を変革させた功績があると評価している。三句目にある「韶濩雲山」の語は、元結の「欸乃曲」五首の三にある「停橈静聴曲中意，好是雲山韶濩音（橈を停めて静かに曲中の意を聴けば，好く是れ雲山韶濩の音なり）という句を踏まえている。四句目の「漫郎」とは元結のあだ名である。つまり、陳子昂が『感遇』詩で示した復古の伝統はその後の元結によって受け継がれていると沈徳潜は言っている。「初刻本」と「重訂本」はともに陳子昂の詩を二十八首収録しており、配列はそれぞれ第十三位と十四位となっている。

才氣縱横蜀道難　　才氣　縱横たり　蜀道難
斂才須就五言看　　才を斂むること　須らく五言に就きて看るべし
古風最得風人意　　古風は最も風人の意を得
莫怪胸中薄建安　　怪しむ莫れ　胸中　建安を薄（かろ）んずるを

これは第二首で、李白についての論評である。李白は、「蜀道難」のような七言歌行体の詩を創作するとき、詩人の才気を駆使するが、五言古詩である『古風』のほうはむしろ才気を抑えて、よく『詩経』の伝統である風人の意趣を得ているので、李白の口から「自從建安來，綺麗不足珍（建安よりこのかたは、綺麗なれども珍とするに足らず）」といった後漢の建安時代から興り始めた美辞麗句を追求する詩風は重んじるに値しないという言葉が出るのも全く可笑しくないこ

とである、と沈徳潜は言っている。「初刻本」と「重訂本」はそれぞれ李白の詩を百三十九首と百四十首収録し、配列はともに第二位である。

　　掣得東溟掉尾鯨　掣し得たり　東溟の掉尾の鯨
　盤空硬語浩縱横　空に盤る硬語　浩として縱横たり
　　紛紛西抹東塗手　紛々たる西抹東塗の手
　請讀南山與北征　請う　南山と北征とを読まんことを

これは第三首で、杜甫と韓愈を論評するものである。一句目は杜甫の「戯為六絶句」の四における「未掣鯨魚碧海中（未だ鯨魚を碧海の中に掣かず）」の句を用い、二句目は韓愈の「薦士詩」における「横空盤硬語、妥帖力排奡（空に横たわって硬語を盤らしめ、妥帖して奡を排す）」の句を踏まえたものである。三句目の「西抹東塗手」は、元好問の「論詩三十首」の十五「世間東抹西塗手（世間の東抹西塗の手）」に出典し、杜韓の詩風に不満を持っている世間の者を批判するものである。沈徳潜は、杜甫と韓愈の五言古詩は東海の巨鯨をコントロールできるほど筆力が強く、空いっぱいに響き渡るほど詩の響きが雄大で、世間の塗りたくる作家達よ、韓愈の「南山」、杜甫の「北征」のような作品をよく読め、と言っている。「初刻本」と「重訂本」は杜甫の詩をそれぞれ二百四十一首と二百五十五首収録し、第一位となっている。また、韓愈の詩を四十一首と四十三首収め、第七位と第九位となっている。

　　水窮雲起天然句　水窮　雲起　天然の句
　疏雨微雲正頡頏　疏雨　微雲　正に頡頏す
　此是五言真絶調　此れは是れ　五言の真絶調
　長城何獨號文房　長城は何ぞ独り文房のみを号さん

これは第四首で、王維と孟浩然を論評するもので、兼ねて劉長卿にも及んでいる。一句目の「水窮」「雲起」は、王維の五言律詩「終難別業」の頸聯「行到水窮処，坐看雲起時（行きて到る　水の窮まる処、坐して看る　雲の起こる時）」を用い、二句目の「疏雨」「微雲」は、孟浩然の「微雲淡河漢，疏雨滴梧桐（微雲　河漢淡し、疏雨　梧桐に滴る）」という詩句を用いている。沈徳潜は、王孟の詩は天然の調べがあり、ともに五言律詩の「真絶調」で、いわゆる「五言長城」は決して劉長卿だけの称号ではないと言っている。王維の詩はそれぞれ九十二首と百四首収められ、配列はともに杜甫、李白に次ぐ第三位である。孟浩然の詩は「初刻本」と「重訂本」では共に三十七首収められ、それぞれ第八位と第十一位である。劉長卿の詩は五十八首と五十四首収められ、第五位と第七位となっている。

　　韋柳詩篇味無味　韋柳の詩篇　無味を味わう
　元音好向此中求　元音　好く此の中に求む
　　後人多事輕軒輊　後人　事を多くして軽がるしく軒輊す
　千古蘇州並柳州　千古に蘇州は柳州に並ばん

これは第五首で、韋応物、柳宗元を論評するものである。韋応物と柳宗元の詩は「元音」で、その「無味」のところがまさに味わいのあるところである。後の人がむやみに二人に甲乙を付けようとするが、まったくおせっかいなことで、両者は互いに肩を並べるものであると、沈徳潜は評価している。この詩に「東坡謂韋不如柳，後人俱謂柳不如韋柳。（東坡謂う、韋は柳に如かずと、後の人は俱に謂う、柳は韋に如かずと）」という自注がある。王士禛はかつて韋応物と柳宗元について、「東坡謂柳柳州詩在陶彭澤下，韋蘇州上。此言誤矣。余更其語曰：韋詩在陶彭澤下，柳柳州上。（東坡謂う、柳柳州の詩は陶彭澤の下、韋蘇州の上に在りと。此の言は誤れり。余、其の語を更いて曰く、韋詩は陶彭澤の下、柳柳州の上に在り）」というように甲乙を付けている。これによれば、沈徳潜の云う「後人」とは蘇軾や王士禛らも含まれていることが分かる。「初訂本」と「重訂本」に収められる韋応物の詩は六十六首と六十三首で、配列はいずれも第四位となっている。柳宗元の詩は三十三首と四十四首で、第九位と第十位となっている。

　　諷喩千篇翻水成　諷喩の千篇　水を翻（ひるがえ）して成り
　元和風格見高情　元和の風格　高情見（あら）わる
　　如何原上離離草　如何ぞ原上の離離たる草
　偏向尋常句得名　偏（ひとえ）に尋常の句に名を得んや

これは第六首で、白居易を論評するものである。この詩に「逋翁賞「野火燒不盡」二句，樂天因此得名。（逋翁は『野火燒けども尽きず』の二句を賞す。樂天は此れに因りて名を得）」という自註がある。沈徳潜は、白居易の名を世に知らしめた「野火燒不尽，春風吹又生（野火　燒けども尽きず、春風吹きて又生ず）」のような詩は、ただの「尋常の句」に過ぎず、本当に「元和の風格」を代表し、その「高情」が見られるのは白居易の「諷喩詩」であるという見解を示している。「初訂本」に収められた白居易の詩は七言絶句四首だけであるが、「重訂本」では各詩体の詩が計六十首も選ばれて、配列は一気に杜甫、李白、王維、韋応物に次ぐ第五位にまで上がらせている。[二]

　　奉禮當年運意微　奉礼　当年　意を運（めぐら）すこと微なり
　女蘿山鬼是吾師　女蘿　山鬼　是れ吾が師なり

時人不識風騒體　時人は風騒の体を識らずして
只賞天驚石破詩　只だ天驚石破の詩を賞すのみ

これは第七首で、李賀を論評するものである。奉礼郎の職を務めた李賀の詩は、詩意の表現手法が非常に含蓄で深みがある。このような手法は屈原の「騒体」に由来している。今の人はそれが理解できないで、単に彼の「女媧煉石補天處，石破天驚逗秋雨（女媧 石を煉って天を補う処、石は破れ 天は驚いて 秋雨を逗む）」のような詩を称賛している。「初訂本」には李賀の名が見られず、「重訂本」には李賀の詩十首選ばれている。

共傳獺祭駆材富　共に伝う　獺祭　材を駆(か)ること富かなりと
更説西昆體制卑　更に説く　西昆の体制は卑(いや)しと
錦瑟無題添注脚　錦瑟　無題に注脚を添えて
眼中曾否見韓碑　眼中　曾てせんや否や韓碑を見る

これは第八首で、李商隠を論評するものである。李商隠の詩は故事を多く使い、詩材が非常に豊富であると言われている。宋の初期において李商隠の詩を手本とした所謂「西昆体」の詩は格調が高くない。眼力のない人達は李商隠の「琴瑟」や「無題」の詩を好んで面倒を嫌わず「注脚を添える」が、李商隠の詩の真価を示す「韓碑」を目にしたことがあろうか。「初訂本」と「重訂本」では李商隠の詩はそれぞれ三十首と五十首選ばれており、第十一位と第八位となっている。

浩氣孤行見性情　浩氣　孤行　性情見わる
儋州歸後更澄泓　儋州より歸えりし後　更に澄泓
無端滄海横流句　端無く　滄海横流の句
却怪遺山也浪評　却って怪しむ　遺山も浪(みだ)りに評するを

これは第九首で、宋代の蘇軾を論評するものである。蘇軾の詩は浩然たる正気があり、一字一句に詩人の性情を見ることができる。特に左遷された海南島の儋州から帰った後の作品はさらに広く深く澄みわたる境地に達している。遺山（元好問）は、「論詩三十首」の二十二において「只知詩到蘇黄尽，滄海横流却是誰（只だ知る 詩は蘇黄に到りて尽くと、滄海 横流するは却って是れ誰ぞ）」と言って、蘇軾と黄庭堅の詩は唐詩の流れから外れていると批判しているが、沈徳潜は、元好問のこの見解はでたらめな意見だと言い切って、蘇軾を高く評価している。『宋金三家詩選』に蘇軾の詩は二巻、合わせて百八十五首選ばれている。

全楚堂堂納漢江　全楚　堂堂として漢江を納め
劇怜曹檜不成邦　劇(はなは)だ怜れむ　曹檜　邦を成さざるを
四靈氣象真衰颯　四靈の氣象　真に衰颯たり
却對歐梅不肯降　却って歐梅に対して降るを肯(がえん)ぜず。

これは第十首で、宋代の詩風を論評するものである。沈徳潜は、宋代初期の欧陽修と梅堯臣は「全楚堂堂納漢江」の勢いで、宋一代の詩風を切り開いていたが、南宋の「永嘉四霊」（徐照、徐璣、翁巻、趙師秀）は欧梅の詩風を受け継がず、晩唐の詩を提唱し、詩の道がますます狭くなり、衰えてしまった。それは、まさに『詩経』に収められた十五の国風のうち、第十三位と十四位に配列されている檜風と曹風のようなもので、衰微極まりで、論評に値しないと、沈徳潜は言っている。

出師二表平生志　出師の二表　平生の志
光景流連偶自嬉　光景に流連するは偶たま自ら嬉ぶ
嘆息後村粗作序　嘆息す　後村は粗かにして序を作り
未曾解讀渭南詩　未だ曾て渭南の詩を解き讀まずと

これは第十一首で、宋代の陸游を論評するものである。陸游は「書憤」の尾聯に「出師一表真名世，千載誰堪伯仲間（出師の一表 真に世に名あり、千載 誰か堪えん 伯仲の間）」と詠い、中原の失地を回復するために自分の労苦を顧みることなく、全力を尽くす諸葛亮に対して崇拝極まりの情を述べている。沈徳潜は、これこそが陸游の「平生の志」であり、景色ばかり描いた作品は陸游の本領ではなく、後村（劉克荘）は陸游の詩集のために序を作ったが、残念ながら陸游の詩の真価が分かっていない、と言っている。『宋金三家詩選』に陸游の詩は二巻、合わせて二〇八首選ばれている。

谷音一卷千秋業　谷音の一巻　千秋の業
思逐精靈入窈冥　思い　精霊を逐いて窈冥に入る
字字遺民雙眼淚　字字　遺民の双眼の涙
如聞麦飯哭冬青　麦飯　冬青を哭するを聞くが如し

これは第十二首で、宋の遺民の詩を論評するものである。『谷音集』二巻は、元代の杜本が編集したものである。沈徳潜は「『谷音』は皆宋の遺民の詩である」の注を付けている。杜本がこの『谷音集』を編集したのは実に不滅の「千秋業」であり、これらの詩を読むと、思いは忠節を固く守る遺民たちの精霊を追って奥深い境地に入り、一文字一文字、一句一句に遺民たちの涙が滲んでいることを感じ、まるで厳しい冬に臨んでも青々と茂っている女貞の木の不屈な精神を讃える歌を聴いているようである。この詩は、明朝の最後の永明王朝が滅びて僅か

四十三年しか経っていない年に作られた。明の遺民である祖父沈欽圻の影響を少なからず受けた沈徳潜は、嘗て自ら明朝の遺民の詩を集めたこともあった。[三] この詩から沈徳潜の遺民への思いに非常に深いものがあることが感じられる。

以上は、「論詩絶句」の基本的内容である。「論詩絶句」に論評された詩人の殆どは、沈徳潜のその後の『唐詩別裁集』や『宋金三家詩選』においてそれぞれ高い位置を占めている。「論詩絶句」に示された見解は基本的に沈徳潜の詩学の礎と成っていると言っても過言ではない。

三、唐代の五言古詩についての評価

唐代の五言古詩に対する評価は、明代中葉の李攀竜（一五一四－一五七〇）以来、詩学史における大きな問題の一つである。李攀竜には「唐無五言古詩」という有名な論断がある。彼は「唐詩を選ぶ序」で「唐無五言古詩而有其古詩。陳子昂以其古詩為古詩，弗取也。（唐に五言古詩無し。而して其の古詩有り。陳子昂其の古詩を以て古詩と為すも、取らざるなり）」と言っている。[四] このような認識の下で、李攀竜が編集したとされている『唐詩選』には、唐代の五言古詩はわずか十四首しか収めておらず、所収詩の総数四百六十五首の三パーセントとなっている。李攀竜と王世貞の二人が編集した『古今詩刪』では、巻十から巻十一までは唐代の詩人三十一人の百二十一首の五言古詩を収めているが、陳子昂の八首のうちその代表作とされる「感遇詩」、李白の十首のうちその復古の代表作「古風」、杜甫の十六首のうちの「三吏」「三別」「北征」などの作品は、いずれも収められていない。つまり、李攀竜、王世貞は古詩の選別に当たって漢魏時代の古詩を基準とし、彼らの「古体は必ず漢魏」を模範とする詩学的主張を表している。唐代の五言古詩は、明代詩壇を牛耳った「前後七子」から殆ど無視されていると言えよう。

清代に降って、詩壇の「正宗」と推された王士禛は、李攀竜の論断に肯定的態度を示している。弟子から「李攀竜のこの見解は果して定論であるか」という質問をされたとき、王士禛は、「滄溟先生論五言，謂『唐無五言古詩，而有其古詩。』此定論也。……要之，唐五言古固多妙緒，較諸十九首、陳思、陶、謝，自然区別。（滄溟先生、五言を論じて謂う、『唐に五言古詩無し。而して其の古詩有り』と。此れ定論なり。……之を要するに、唐の五言古は固より妙緒多けれど、諸を十九首、陳思、陶、謝に較べば、自然と区別あり）」と即答した。[五] このような認識に基づいて、王士禛は『古詩選』を編集したとき、漢代の五言古詩においては全て採録し、魏晋以下においてはしだいに厳しくするも、やはり積極的に採録し、斉・梁・陳・隋においてもその作者を排除していないが、唐においては僅か陳子昂、張九齢、李白、韋応物、柳宗元の五人の詩しか取っていない。[六] 明らかに、王士禛は李攀竜と同じように漢魏の古詩を基準とし、唐の五言古詩に「妙緒」が多くあることを認めながらも、やはり漢魏の古詩と異なる唐代の五言古詩を『古詩選』の外に排除してしまった。陳子昂ら五人の古詩を取ったのも、これらの作品が漢魏の古詩の基準に合うと認めていたからにすぎないであろう。唐代の五言古詩は、王士禛が盟主を務めた清代初期の詩壇においても依然として有るべき評価を与えていないと言ってよい。

王士禛とほとんど同時代の葉燮は、李攀竜のこの論断を明確に否定している。葉燮はその『原詩』で次のように李攀竜に反論している。「李攀龍謂唐無古詩，又謂陳子昂以其古詩為古詩，弗取也。……盛唐諸詩人，惟能不為建安之古詩，吾乃謂唐有古詩，正惟子昂能自為古詩，所以為子昂之詩耳。（李攀竜謂う、唐に古詩無しと。又謂う、陳子昂其の古詩を以て古詩と為すも、取らざるなり。……盛唐の諸詩人、惟だ能く建安の古詩を為らざるのみにして、吾乃ち唐に古詩有りと謂う。正に惟だ子昂、能く自ら古詩を為りて、子昂の詩為る所以なるのみ）」と。[七] つまり、葉燮は、唐の五言古詩は漢や魏の古詩と異なっているからこそ唐代の古詩があると言っている。この考え方は李攀竜や王士禛と違って、漢や魏の古詩の基準を以て唐の五言古詩の存在価値を否定するのではなく、積極的な評価を与えている。

沈徳潜は二十六歳から三十一歳まで葉燮に従って詩のことを学んでいた。「論詩絶句」の第一、第二、第三、第五首では、特に陳子昂、李白、杜甫、韋応物、柳宗元らの五言古詩を高く評価し、『唐詩別裁集』においても陳子昂の五言古詩二十首、李白三十八首、杜甫五十一首、韋応物四十六首、柳宗元十七首を採っている。しかも「初訂本」と「重訂本」における五言古詩の収録割合も少なくない。[八] これは彼の師である葉燮の詩学思想の影響を受けていることを物語っている。沈徳潜は、陳子昂を評して「追建安之風骨，變齊梁之綺靡，寄興無端，別有天地。（建安の風骨を追って、斉梁の綺靡を変じ、興を寄するに端無く、別に天地有り）」[九] と言い、李白を評して「太白詩縦横馳驟，獨古風二卷不矜才，不使氣，原本阮

公，風格俊上。（太白の詩、縦横馳驟、独り古風の二卷、才を矜らず、気を使わず、阮公に原本し、風格俊上たり）[一〇] と言い、王維、孟浩然、儲光羲、韋応物、柳宗元を評して「陶詩胸次浩然，其中有一段淵深樸茂不可到處。唐人祖述者，王右丞有其清腴，孟山人有其閑遠，儲太祝有其樸實，韋左司有其沖和，柳儀曹有其峻潔，皆學焉而得其性之所近。（陶の詩、胸次浩然たり、其の中に一段の淵深樸茂にして到る可からざる処有り。唐人の祖述する者、王右丞は其の清腴有り、孟山人は其の閑遠有り、儲太祝は其の樸實有り、韋左司は其の沖和有り、柳儀曹は其の峻潔有り、皆焉を学びて其の性の近き所を得）[一一] と言っている。いわゆる「追建安之風骨」、「原本阮公」、王、孟、儲、韋、柳が陶淵明の「清腴」「閑遠」「樸實」「沖和」「峻潔」を得ている云々は、いずれも詩の史的発展における「源」と「流」の継承関係といった視点から唐の五言古詩を評価するものである。沈徳潜は、唐代の五言古詩と漢魏の古詩との違いを認めると同時に、前者が後者の流れを受け継いだ文学史的事実を指摘している。これはまさに文学の発展における「源」と「流」の関係を重視する葉燮の詩学思想を応用したものと見てよい。それによって、沈徳潜は明代の李攀竜以来ずっと論争になっていた唐代の五言古詩に対する評価の問題を適切に解決することができたのである。そして、こうした唐代の五言古詩についての見方は、三十二歳でこの「論詩絶句」を作った時にすでに形成されていたと言えよう。

四、李杜推賞と王孟の取り入れ

「論詩絶句」の中で、李白・杜甫・韓愈・蘇軾と王維・孟浩然・韋応物・柳宗元といった二組の詩人の名前を同時に見ることができる。実は、清代の詩学的発展史における重大の問題がそこに潜んでいる。

李白・杜甫・韓愈・蘇軾は葉燮が最も推賞した詩人である。沈徳潜も『唐詩別裁集』や『宋金三家詩選』において、師である葉燮と同じように李杜韓蘇の詩を推賞している。然しながら、沈徳潜の前の詩壇領袖である王士禛は、「神韻説」を提唱し、詩を学ぶ者に王孟韋柳（王維・孟浩然・韋応物・柳宗元）の詩を手本として示し、李白や杜甫を排除した。こうした詩学的主張が端的に示されているのは、王士禛が康熙二十七年（一六八八）に編集した『唐賢三昧集』である。（以下、『三昧集』と呼ぶ）このアンソロジーは上、中、下の三巻に分けられ、王維を初めとする盛唐の詩人四十二人、詩四百四十八首が選ばれているが、李白と杜甫の名前はない。その理由について、王士禛は「李、杜の二公を録せざる者は、王介甫の『百家』の例に仿うなり」と説明している。[一二] この説明は王士禛の弟子翁方剛に指摘されたように「言い訳」に過ぎない。実のところ、王士禛はその「神韻説」に基づいて、「詩品」、「詩体」、詩の「正変」の視点から李杜の詩を排斥し、王孟韋柳の詩を提唱したのである。この指摘についての詳細は、拙論「融和へ向かう清代詩学について―王士禛から沈徳潜へ」（『電気通信大学紀要』第二二巻第一号）に論じたので、ここではそのポイントを述べることに留まりたい。

「詩品」の高下について、王士禛はかつて次のような見解を示している。「司空表聖作『詩品』，凡二十四。有謂「冲澹」者，……有謂「自然」者，……有謂「清奇」者，……是品之最上者。（司空表聖『詩品』を作り、凡そ二十四。「冲澹」と謂う者有り、……「自然」と謂う者有り、……「清奇」と謂う者有り、……是れ品の最上なる者なり）」と。[一三] つまり、王士禛は「冲澹」「自然」「清奇」の三詩品を司空図の言う「二十四の詩品」の中で最上の詩品として見ている。この三詩品はそれぞれ『詩品』の第二、第十と第十六に見える。郭紹虞の『詩品集解』では「冲淡」の品について「皋解」を引いて言う、「此格陶元亮居其最。唐人如王維、儲光羲、韋應物、柳宗元亦為近之。（此の格、陶元亮其の最に居る。唐人の王維・儲光羲・韋応物・柳宗元の如きも亦た之に近しと為す）」と。[一四] また、配列第一の「雄渾」の品において同じ「皋解」を引いて言う、「此非有大才力大學問不能，文中惟莊馬，詩中惟李杜，足以當之。（此れ大才力大学問有るに非ざれば能わず、文中にては惟だ莊馬のみ、詩中にては惟だ李杜のみ、以て之に当たるに足る）」と。[一五] 王士禛は、李杜の詩風にふさわしい「雄渾」を採らずして王孟韋柳の詩風にぴったりな「冲淡」、「自然」、「清奇」を採り、しかもこの三つの詩品のほうが「雄渾」よりも上で、詩の最高の品格と考えている。これによって、王士禛が李杜の詩を『三昧集』の外に排除したのは彼の詩品について見解に基づいたものであることが分かる。

『三昧集』に李杜の詩を収めない理由にはまた王士禛の「詩体」についての考え方が働いている。王士禛は次のように言う。「作古詩須先辨體。……譬如衣服，錦則全體皆錦，布則全體皆布，無半錦半布之理。……又嘗論五言，『感興宜阮陳，山水閒適宜王韋，亂離行役，鋪張叙述宜老杜，未可限以一格。』（古詩を作るは須らく先に体を辨ずべし。……譬うれば衣服の如し、錦なれば則ち全体皆錦なり、布なれば則ち全体皆布なり、半錦半布の理無し。……又嘗て五言を論ず、『感興は阮陳を宜しとし、山水閒適は王韋を宜しとし、乱離行役、鋪張叙述は老杜を

宜しとし、未だ一格を以て限る可からず』」と。[一六] この発言には次の三重の意味がある。一は、詩を作るに当たって、先ず詩の「体」（時代や詩人の独自の詩風）を見極めなければならないこと。二は、異なる「詩体」を混合してはいけないこと。三は、「山水閑適」の詩は、陶淵明や王維、韋応物らの詩を手本にすれば宜しく、「乱離行役」、「鋪張叙述」の詩は、杜甫の詩を手本にすれば宜しいこと。『三昧集』の趣旨は、詩を学ぶ者に王維や孟浩然の「山水閑適」の「体」を唱えるところにあるのだから、異なる「詩体」を混合してはいけないという原則に基づけば、「乱離行役」、「鋪張叙述」を得意とした杜甫の詩を取らないのは当然の結果になるのである。これによって、王士禎は、詩体の角度から杜甫らの詩を『三昧集』の外に退けたことが分かる。

『三昧集』に李杜らの詩を選ばなかったもう一つの理由は詩の「正変」という問題がある。王士禎は唐代の五言古詩について次のように発言している。「唐五言詩，開元、天寶間，大匠同時竝出。王右丞而下，如孟浩然、王昌齡、岑参、常建、劉脊虚、李頎、綦母潜、祖詠、盧象、陶翰，之數公者，皆與摩詰相頡頏。……杜甫沈鬱，多出變調。李白、韋應物超然復古。然李詩有古調，有唐調，要須分別觀之。（唐の五言詩、開元・天宝の間、大匠同時に竝び出づ。王右丞より下、孟浩然・王昌齡・岑参・常建・劉脊虚・李頎・綦母潜・盧象・陶翰の如きの数公の者は、皆摩詰と相頡頏す。……杜甫、沈鬱たりて、多く変調を出す。李白・韋応物超然として復古す。然れども李の詩古調有り、唐調有り、要するに須らく分別して之を観るべし」と。[一七] 王士禎はここで「変調」「古調」「唐調」という三つの言葉を使っている。「古調」とはつまり李攀竜や王士禎が古詩を選別するときに基準とした漢魏の古詩を指す。これに対して「唐調」とはつまり李攀竜に「弗取」とされた陳子昂らの唐代の五言古詩を意味する。さらに、杜甫の五言古詩の「変調」とは、その「沈鬱頓挫」の風格で、漢魏古詩の「古調」に対しても、陳子昂らの「唐調」に対しても、まったく変わった「調子」という意味であろう。興味深いことに、王士禎の言う王維以下の「數公」の名前は、みな『三昧集』に見られるが、「多く変調を出す」杜甫、また「唐調」もある李白の名前はそこには見ることができない。言い換えれば、『三昧集』に選ばれた王維らの詩はみな漢魏古詩の「古調」或いは「正声」である。そして、杜甫は「変調」で、李白は「唐調」もあるので、排除されたわけであろう。よって、王士禎は詩の「正変」の角度から、杜甫らの詩を『三昧集』の外に退けたのである。

要するに、李杜の詩を『三昧集』の外に退けたのは王安石の『唐百家詩選』の前例に倣ったのではなく、本当のところは「詩品」、「詩体」、詩の「正変」についての王士禎の詩学基準に基づいた結果だと言わざるを得ないのである。

詩壇盟主王士禎が王孟韋柳の「山水閑適」「沖和淡遠」の詩を推賞することによって、詩人たちは現実から目をそむけ、自然山水に陶酔し、「吟風弄月」の詩を作り、詩歌発展の方向を『詩経』以来の中国古典詩歌の現実主義の伝統から大きく転換させた結果になってしまった。晩年の王士禎は、「神韻説」によって詩壇にもたらした弊害を自覚したようで、「雄渾」や「豪健」の風格を以て救済策を講じようとしていた。彼は「跋陳説巖太宰丁丑詩巻」で次のように言っている。「自昔稱詩者，尚雄渾則鮮風調，擅神韻則乏豪健，二者交譏。唯今太宰説巖先生之詩，能去其二短，而兼其兩長。（昔自り詩を称する者、雄渾を尚べば則ち風調鮮く、神韻を擅にすれば則ち豪健乏しく、二者交譏す。唯だ今太宰説巖先生の詩のみは、能く其の二短を去り、其の両長を兼ぬ）と。[一八] 前に述べたように、王士禎はかつて「詩体」について「錦なれば則ち全体皆錦なり、布なれば則ち全体皆布なり、半錦半布の理無し」というように、異なる詩体を混同してはいけないという考え方を以て、「雄渾豪健」の李杜の詩を『唐賢人三昧集』の外に退けたわけである。しかし、この跋文においては、太宰説巖先生が「雄渾」と「神韻」のもたらす短所を取除き、長所を兼ねることができたと言っている。明らかに、王士禎は異なる「神韻風調」と「雄渾豪健」の詩体を融合しようとし、「詩体」についての考え方に変化が認められるようになった。『漁洋山人自撰年譜』によれば、「跋陳説巖太宰丁丑詩巻」は康熙三十四年乙亥から四十三年甲申（七十一歳）までの雑文を収録した『蚕尾続文』に見えるから、『三昧集』（康熙二十七年戊辰）を世に問うた数年後に書かれたものになる。つまり、『三昧集』の編纂時においてはこのような考え方がまだなく、晩年に「神韻説」の弊害を認識し、「雄渾豪健」を以て救おうとした考え方に変わったのである。

王士禎は杜甫の詩を好まないが、沈徳潜の師である葉燮は最も杜甫を推賞している。彼は杜甫の詩について、「杜甫之詩，包源流，綜正変。（杜甫の詩、源流を包み、正変を綜す。）」と言い、また「千古の詩人、杜甫を推す」と称えている。[一九] 沈徳潜は師の説を受け継ぎ、杜甫の五言古詩について次のように評価している。「蘇李十九首以後，五言所貴大率優柔善入，婉而多風。少陵材力標擧，篇幅恢張，從横揮霍，詩品又一變也。要其為國愛君，感時傷亂，憂黎元，希稷契，生平種種抱負無不流露於楮墨中。詩之變，情之正者也。（蘇李、十九首以後、五言の貴ぶ所は大率優柔善入、婉にして風多し。少陵は材力標挙、篇幅恢張、従（縦）横揮霍、

詩品又一変せり。要するに其国の為にして君を愛し、時に感じて乱を傷み、黎元を憂え、稷契を希い、生平の種々の抱負、楮墨の中に流露せざるなし。詩の変なれども、情の正たる者なり)」と。[二〇] 沈徳潜は、杜甫の詩にその詩品の「変」を認めながらも、その詩情の「正」をより重視している。これは、王士禛の視点と全く異なるものである。この違いは、「初刻本」を改訂した際に書いた「重訂唐詩別裁集序」で次のようにはっきりと表明されている。「新城王阮亭尚書選唐賢三昧集，取司空表聖不著一字，盡得風流，厳滄浪羚羊掛角，無迹可求之意，蓋味在鹽酸外也。而於杜少陵所云鯨魚碧海，韓昌黎所云巨刃摩天者或未之及。余因取杜韓語意，定唐詩別裁，而新城所取亦兼及焉。(新城の王阮亭尚書、『三昧集』を選ぶに、司空表聖の『一字を著けず、尽く風流を得』、厳滄浪の『羚羊角を掛けて、迹は求む可き無し』の意を取る。蓋し『味は塩酸の外に在るなり』。而して、杜少陵が云う所の『鯨魚碧海』、韓昌黎が云う所の『巨刃天を摩す』者、或いは未だ之に及ばず。余、因りて杜韓の語意を取りて、『唐詩別裁』を定めて新城が取る所も亦た兼ね及ぶなり)」と。沈徳潜は、王士禛と違って「雄渾豪健」の李杜の詩を推賞しながらも、「風調神韻」の王孟韋柳の詩を高く評価している。「新城が取る所も亦た兼ね及ぶなり」という言葉の通り、「初刻本」においても「重訂本」においても、杜甫は一位、李白は二位に対して、王維は三位、韋応物は四位となっている。

指摘しなければならないのは、沈徳潜のこうした見解は彼が三十二歳の時に書いた「論詩絶句」ですでにほぼ形成されているということである。これでわかるように、王士禛晩年の「雄渾豪健」と「風調神韻」を融合しようとする詩学的考え方を受け継いだのは他でもなく、沈徳潜だったのである。王士禛の「神韻説」の後に沈徳潜の李杜提唱の詩論が詩壇の主流になったのは、清代詩学発展の必然と言えよう。

五、唐詩の「宗法」と宋詩の「怡情」

初心者が作詩を学ぶに当たって、唐詩を手本にすべきか、それとも宋詩を手本にすべきか、これも詩学史上、特に明代の「前後七子」以来の古い問題である。前後七子は「詩は必ず盛唐」と主張する。「公安派」は七子の主張に真っ向から反対して、「唐に詩無し」、「詩文は宗元の諸大家に在り」[二一] と唱える。これによって、この問題における明代の諸詩派の考え方は非常に極端であることが分かる。清代に入ると、「開国の宗匠」と称される王士禛は明確に「唐有詩，不必建安黄初也。元和以後有詩，不必神龍開元也。北宋有詩，不必李杜高岑也。(唐に詩有り、建安、黄初を必とせざるなり。元和以後も詩有り、神龍、開元を必とせざるなり。北宋も詩有り、李杜高岑を必とせざるなり)」[二二] と述べている。七子の「必」から王士禛の「不必」へと変わっていくことから、清代の詩学がこの問題においてすでに対立から融合へと変化していく趨勢が見られる。

「開国の宗匠」である王士禛が唐詩と宋詩を対立させず、宋詩をも学ぶ対象とした考え方は非の打ち所がない。然しながら、彼の同僚、詩友、弟子、例えば汪琬、宋犖、汪懋麟らはみな宋元詩の推賞者である。宋犖の友人呉之振は『宋詩鈔』一百巻を編集し、王士禛の弟子顧嗣立は『元詩選』一百十一巻を刊行している。王士禛とその周りの人たちが宋元の詩を鼓吹することによって、詩壇で宋元詩を学ぶ風潮が次第に盛んになり、逆に漢や魏、唐の詩を顧みることもしない状況になってしまった。このような状況について、葉燮の『原詩』内編巻二には「學詩者……從事於宋元、近代，而置漢、魏、唐人之詩而不問。(詩を学ぶ者は……宋元、近代に従事して、漢、魏、唐人の詩を置いて問わず)」という言及がある。また、沈徳潜も次のように回顧している。「徳潜於束髪後即喜鈔唐人詩集，時競尚宋元，適相笑也。(徳潜は束髪後、即ち喜びて唐人の詩集を鈔す。時競いて宋元を尚び、適々相笑うなり)」と。[二三] また、「相沿既久，家務觀而戸致能。……甚至譏誚他人，則曰此漢魏，此盛唐。耳食之徒，有以老杜為戒者。(相沿うこと既に久しくして、務観を家とし致能を戸とす。……甚だしきに至りては他人を譏誚して、則ち曰わく、此れ漢魏、此れ盛唐と。耳食の徒は、老杜を以て戒めを為す者有り)」と述べている。[二四] こうした行き過ぎた詩風の変化に直面して、王士禛も「二十年來，海内賢知之流，矯枉過正，或乃欲祖宋而祧唐，……江河日下，滔滔不返，有識者惧焉。(二十年來、海内の賢知の流、枉を矯めて正に過ぎ、或いは乃ち宋を祖として唐を祧せんと欲し、……江河日に下り、滔滔として返らず、識有る者は焉を惧る)」[二五] と危惧を表明した上で、「以太音希聲，藥淫哇錮習，『唐賢三昧』之選，所謂乃造平淡時也。(太音希声を以て、淫哇錮習を薬し、『唐賢三昧』の選、所謂乃ち平淡に造る時なり)」[二六] のように、「太音希声」である『三昧集』を刊行することで、詩壇に氾濫している宋元詩一辺倒といった弊害を取り除こうとしているのである。

若いころから唐詩のみならず宋詩も学ぶ手本であると主張し、そして自ら実践

をしてきた王士禎は、五十五歳の時に盛唐詩一辺倒の『三昧集』を世に出すことで、これまでの詩学的実践を自ら否定してしまう形となった。『三昧集』では、宋元の詩どころか、初唐や中唐、晩唐の詩も退け、盛唐の詩しか採らず、そして盛唐においても李白や杜甫の詩を排除し、王維や孟浩然らを代表とする盛唐の詩だけ採っている。これでは、宋元詩をどう評価するかという問題をうまく解決していないだけでなく、唐詩をいかに把握するかといった問題も適切に解決していないと批判されても仕方のないことであろう。そこで、王士禎の後の詩壇盟主にこの問題へのよりよい答えが求められることになったのである。

王士禎の後に詩壇盟主となった沈德潛は、唐詩を推賞しながら宋元詩を排除しない態度を示している。こうした態度は沈德潛の次の言及から推し知ることができよう。彼は蘇軾の詩を論評したとき、「元遺山云：『只知詩到蘇黄盡，滄海横流却是誰？』嫌其有破壞唐體之意，然正不必以唐人律之。（元遺山云う、『只だ知る 詩は蘇黄に到りて尽き、滄海 横流するは 却って是れ誰ぞ』と。其の唐体を破壞する意有るを嫌う。然れども正に必ずしも唐人を以て之を律せず）」[二七] と言い、また『清詩別裁集』において陸次雲の詩を評している時、「雲士詩本真性情出之，故語多沈着。而所選詩轉在宋元，以之怡情，不以之為宗法也。（雲士の詩、真の性情に本いて之を出だす、故に語に沈着多し。而して選ぶ所の詩は転た宋元に在り、之を以て情を怡ばして、之を以て宗法と為さざるなり）」[二八] と述べている。この「不必以唐人律之」と「以之怡情，不以之為宗法」という部分には沈德潛の宋元の詩に対する基本的立場が示されている。「不必以唐人律之」とは、つまり宋や元の詩を見る時に唐詩或いは盛唐詩の基準を用いない。「以之怡情，不以之為宗法」とは、宋元の詩には人を楽しませる鑑賞価値は十分あるが、それを学ぶ手本とすることはしない。明代の李攀竜は古体詩を論ずるとき、漢や魏の古詩を基準として唐代の古詩を否定し、近体詩を論ずるとき、必ず盛唐の詩の基準を以て唐以後の詩を否定する。清代の沈德潛は李攀竜の見方を取らず、「不必以唐人律之」という態度で宋や元の詩を取り扱っているので、その存在を否定していないわけである。彼は、蘇軾の詩を「韓文公後，又開闢一境界也。（韓文公の後、又一境界を開闢するなり）」と讃え、蘇軾門下の諸詩人を「清才林立，並入寰中。（清才林立し、並に寰中に入る）」と褒め、陸游の『劍南集』について「殊有獨造境地（殊に独造の境地有り）」と評価し、「江西派」の黄庭堅、陳與義について、「風骨獨存（風骨独り存す）」と誉め、元代の元裕之の七言古詩を「東坡後一能手也（東坡の後、一能手なり）」と推し、虞集、楊載、范梈、揭傒斯の「四家」について、「詩品相敵（詩品相敵す）」と言っている。[二九] こうした言及はいずれも宋や元の詩に対する積極的な評価である。

しかしながら、沈德潛の立場からすれば、如何に宋や元の詩を評価するかは大事な問題ではあるが、詩の初心者にとって何を手本にすべきかはまた別の問題である。彼は、明確に陸次雲の宋や元の詩の風格に近い作品を選んだのは単にその「怡情」の価値を認めるのであって、それを手本とするのではないと述べている。つまり、沈德潛は宋や元の詩に対する評価の問題とそれを手本とする問題を厳格に区別しているということである。だから、彼は『唐詩別裁集』を編纂して、唐詩を手本とする主張を高々と掲げながら、『宋金三家詩選』も編集している。これによって推していえば、彼が言う「宋詩近腐，元詩近纖。（宋詩は腐に近く、元詩は纖に近し）」[三〇] とは、宋や元の詩を学ぶ手本にすることに反対する態度の現れと理解してよい。また、いわゆる「愚未嘗貶斥宋詩（愚は未だ嘗て宋詩を貶斥せず）」[三一] という表明は、宋や元の詩の「怡情」価値を否定していない意と解釈できる。彼が、若い時から唐や宋の人の詩稿を手で書き写したり、旅の道中でも「唐宋人の詩集を校勘し」たりするのは、こうした態度の具体的な表れであると言ってよい。この「論詩絶句」における第九首から第十二首までの四首はいずれも宋詩についての積極的な評価となっている。三十二歳に書いたこの「論詩絶句」からしても、九十七歳のいまわの際にまだ『宋金三家詩選』の編纂に手を休めていないことからしても、沈德潛は唐詩提唱により宋元の詩を否定してはいないことが分かるだろう。

六、おわりに

「論詩絶句」は沈德潛の三十二歳の時に書いた作品である。この年の一年前の秋、沈德潛の詩学の先生である葉燮は世を去った。沈德潛の『自訂年譜』に「（康熙）四十二年癸未，年三十一。秋，横山先生卒。先是，先生以所制詩古文並及門数人詩，致書於王漁洋司寇。至是，漁洋答書極道先生詩文特立成家，絶無依傍。諸及門中以予與張子岳未，永夫不止得皮得骨，直已得髓。……滔滔千言，惜先生不及見矣。（（康熙）四十二年癸未，年三十一。秋，横山先生卒す。是より先に，先生は所制の詩古文並びに門に及ぶ数人の詩を以て，書を王漁洋司寇に致す。是に至りて，漁洋の答書に先生の詩文は特立して家を成し，絶えて依傍すること無きを

極道す。諸々の及門の中、予と張子岳未、永夫とを以て皮を得て骨を得るに止まらずして、直に已に髄を得。……滔滔たる千言、先生見るに及ばざるを惜しむ）」という記述がある。[三二] これによれば、詩壇盟主である王士禛は、葉燮及びその門下生の詩や古文に対して賛辞を惜しまなかったが、葉燮の詩論書である『原詩』及びその詩論に対しては一言も触れていないことが分かる。実は、これまで述べてきたことからも分かるように、葉燮が最も杜甫を推賞するという点だけを見ても、葉燮と王士禛の詩論にはかなり隔たりがあることが分かる。葉燮の詩学の弟子として、沈徳潜は歴代の詩を選別して、『唐詩別裁集』をはじめとするアンソロジーを世に送り出す形で、葉燮の詩論を継承し、さらに発展させ、唐代の五言古詩についての位置づけ、李杜と王孟の位置づけ、唐詩と宋詩の位置づけといった清代詩学史における重大な問題をうまく解決し、必然的に清代詩壇における主流詩論の流れを王士禛の「神韻説」から沈徳潜の「格調説」へと方向転換させた。そして、こうした趨勢は沈徳潜の三十二歳の時に書いた十二首の「論詩絶句」の中にすでにその手がかりが現れているのである。

注

一　『沈徳潜詩文集』四冊、沈徳潜著、潘務正、李言、編集点校。北京、人民文学出版社、二〇一一年。『一一斎詩』の前に沈徳潜は『留飯草』という詩集があるが、今に伝わらない。『一一斎詩』は合わせて十巻あり、時間順で配列され、己卯から戊子まで、つまり沈徳潜の二十七歳から三十六歳までの作品が収録されている。

二　「初訂本」と「重訂本」では、白居易や李賀（第七首）の詩に対する評価は前後雲泥の差がある。これについては、拙論「関於『唐詩別裁集』的修訂及其理由―「重訂本」與「初訂本」的比較」を参照されたい。台湾、逢甲大学、逢甲人文社会學報二五、二〇一二年十二月。

三　『帰愚文鈔』巻十一「呉不官遺詩序」に「予嘗葺遺民詩二巻，自万年少、陳言夏、邢孟貞、顧與治以下，蒼涼要妙，比於杜原父之『谷音』」とある。

四　李攀竜『滄溟先生集』巻十五。明・隆慶十五年（一五七二）序刊。

五　王士禛『師友詩傳録』。丁福保輯『清詩話』上所収。上海古籍出版社、一九七八年。

六　王士禛著・聞人倓箋『古詩選』巻首にある姜宸英の「阮亭選古詩選原序」に「於漢取全；於魏晋以下遞厳，而遞有所録，而猶不廃夫斉梁陳隋之作者；於唐僅得五人，曰陳子昂、張九齢、李白、韋応物、柳宗元。」とある。上海古籍出版社、一九八〇年。

七　葉燮『原詩』内篇上。丁福保輯『清詩話』下所収。上海古籍出版社、一九七八年。

八　『唐詩別裁集』の「初刻本」と「重訂本」における五言古詩の収録情況は次の通りである。「初刻本」では、五言古詩二巻、詩人四十五人、詩三百四十三首、所収総数の二一パーセントを占めている。「重訂本」では、五言古詩四巻、詩人五十四人、詩三百八十七首、所収総数の二〇パーセントとなってる。

九　沈徳潜編『唐詩別裁集』（「重訂本」）巻一。乾隆二十八年（一七六二）教忠堂重訂本を底本とした影印本。北京、中華書局、一九七五年。

一〇　同上巻二。

一一　沈徳潜『説詩晬語』巻上。丁福保輯『清詩話』下所収。上海古籍出版社、一九七八年。

一二　王士禛『唐賢三昧集』序に「不録李杜二公者，倣王介甫『百家』例也」とある。景印文淵閣四庫全書、第一四五九冊。台北、台湾商務印書館、一九八六年。

一三　王士禛『帯経堂詩話』巻三「要旨類」。張宗柟纂集、戴鴻森校点。北京、人民文学出版社、一九九八年。

一四　郭紹虞『詩品集解』。北京、商務印書館、一九六九年。

一五　同上。

一六　王士禛『帯経堂詩話』巻一「体制類」。

一七　同上「品藻類」。

一八　王士禛撰・程哲編『帯経堂集・蠶尾集』巻二十「跋陳説巌太宰丁丑詩巻」。清刊本。

一九　葉燮『原詩』内篇上。

二〇　沈徳潜『唐詩別裁集』（「初刻本」）「凡例」。康熙五十六年（一七一七）碧梧書屋蔵版刻本。

二一　袁宏道『袁中郎全集』巻二三尺牘「張幼于」。和刻本『漢詩集成』補編第十九輯、汲古書院、一九八七年。

二二　王士禛撰・程哲編『帯経堂集・蠶尾集』巻一「鬲津草堂詩集序」。清刊本。

二三　沈徳潜『唐詩別裁集』（「初刻本」）「原序」。

二四　沈徳潜『沈徳潜詩文集』所収『帰愚文鈔』巻十五『與陳耻庵書』。

二五　王士禛『帯経堂詩話』巻一「品藻類」。

二六　兪兆晟『漁洋詩話序』。『清詩話』上所収『漁洋詩話』巻首。上海古籍出版社、一九七八年。

二七　沈徳潜『説詩晬語』巻下。

二八　沈徳潜『清詩別裁集』巻十五。北京、中華書局、教忠堂本による影印本、一九七五年。

二九　これら論評は、いずれも沈徳潜の『説詩晬語』巻下に見られる。

三〇　沈徳潜『明詩別裁集序』。北京、中華書局、乾隆四年刊本による影印本。一九七五年。

三一　沈徳潜『清詩別裁集』「凡例」。

三二　『沈徳潜詩文集』第四冊所収。

On Shen Deqian's Early Poem-Criticizing Quatrains and Their Poetic Significance

Jianming FAN

Abstract

Poems of Several Tang and Song Dynasty Poets and Some Quatrains is a book written *by Shen Deqian*（沈德潜）at the age of 32. This collection of quatrains mainly criticizes poets in Tang and Song Dynasties, including Chen Zi'ang（陳子昂）, Li Bai（李白）, Du Fu（杜甫）, Han Yu（韓愈）, Wang Wei（王維）, Meng Haoran（孟浩然）, Liu Changqing（劉長卿）, Liu Zongyuan（柳宗元）, Wei Yingwu（韋応物）, Bai Juyi（白居易）, Li He（李賀）, Li Shangyin（李商隠）, Su Shi（蘇軾）, Ouyang Xiu（欧陽修）, Mei Yaochen（梅堯臣）, four other poets in Yongjia（永嘉四霊）, Zhejiang Province and Lu You（陸游）, and others. These quatrains reflect Shen Deqian's poetic views in his early years and deal with several significant poetic issues including the position of Tang poetry, the position of poets like Li Bai, Du Fu, Wang Wei and Meng Haoran, and the position of Tang-Song poetry in the poetic circle in Ming and Qing Dynasties. This paper first discusses the main content of the 12 quatrains together with Shen's basic comments on poetry in Tang and Song Dynasty in his early years. Based on this, the poetic significance of the poem-commenting quatrains is elaborated on the history of poetic development in the Qing Dynasty.

Keywords: Shen Deqian; poem-criticizing quatrains; poetic significance

Received on September 30, 2013.
共通教育部総合文化部会（第二外国語）